

## 私は街を歩きたい ——インベカヲリ★『理想の猫じゃない』論

岩川ありさ

### 1. トランスジェンダー排除に抗って

2018年7月10日、お茶の水女子大学は、2020年度から学部および大学院でトランスジェンダー学生の入学を受け入れることを決定したと記者会見を行った。室伏きみ子学長は同日付けで、「トランスジェンダー学生の受入れについて」という声明を発表した<sup>1</sup>。この声明について報道する際、いくつかの大手メディアは、お茶の水女子大学の声明では、「性自認」という言葉を用いていたにも関わらず、「心は女性」という表現を用いた報道を行った<sup>2</sup>。「心は女性」という表現は、「性自認」と同じ意味を持つものではない。むしろ、「心は女性」という表現は、社会的な承認の枠組みからは無縁で、他者からは見えない内側にある「心の性」が実は女性であって、「身体は、それでも／まだ／かつて、男性である／あった」と印象づけようとする言葉だ。しかし、お茶の水女子大学の声明が強調しているのは、「固定的な性別意識に捉われず、ひとりひとりが人間としてその個性と能力を十分に発揮し、「多様な女性」があらゆる分野に参画できる社会の実現<sup>3</sup>という点であり、シスジェンダー中心の社会や性別二分法によって生じた不利益を是正し、社会的な障壁を取り除くことに力点が置かれている。いうまでもなく、お茶の水女子大学の決定は、シスジェンダー中心の社会や性別二分法によって生じた、社会的な不均衡を是正し、教育の機会を平等にすることが目的なのだ。これまでの世界的な潮流を見ても、トランスジェンダーの人々は、社会制度の設計、法律の制定、インフラストラクチャーの整備を行う際、話しあいのテーブルにつくことすらできなかった。多くのトランスジェンダーたちは、社会福祉が受けられなかったり、就労の機会を奪われてきた<sup>4</sup>。そのために生じていた不利益や不均衡を是正するために何ができるのかという問いが、お茶の水女子大学の声明には響いている。

この会見は好意的に受けとられもしたが、攻撃にもさらされ、現在でも、TwitterなどのSNSでは、トランスジェンダーを排除する発言が繰り返されている<sup>5</sup>。2019年1月9日には、「はてな匿名ダイアリー」に、「ツイッターのせいで高校からの友達が死んだ」という記事が投稿された。

1 「トランスジェンダー学生の受入れについての記者会見を開催しました」(2018年7月12日 お茶の水女子大学 <http://www.ocha.ac.jp/news/20180711.html>)

2 「朝日新聞」は、「『心は女性』入学受け入れへ お茶の水女子大、2020年度から」という小見出しで、「お茶の水女子大(東京都文京区)は2020年度から、戸籍上は男性だが、心の性別が女性のトランスジェンダーの学生について、全学部で受け入れることを決めた」(2018年7月3日、東京、朝刊、2社会面)と報じた。2018年7月11日朝刊の「社説」では、「多様な性のあり方を認め、学びの場を保障する動きが広がるのは意義深い」と述べ、社会的な意義を強調している。

3 「読売新聞」は、「『心は女性』の男性女子大OK トランスジェンダー お茶大 20年度から」(2018年7月3日、東京、朝刊、2面)と報じた。同記事には、「戸籍上は男性でも性自認は女性のトランスジェンダー」とトランスジェンダーの説明をしているが、「トランスジェンダーは、心と体の性が一致しない人で、診断名は性同一性障害」とも書いており、トランスジェンダーと性同一性障害を混同している。また、「男性のトランスジェンダーを受け入れれば初めて」と報じており、「男性のトランスジェンダー」という表現はトランス女性についての報道としては適切ではない。

4 「毎日新聞」は、「トランスジェンダー：お茶女大、学生受け入れ 20年度から」(2018年7月3日、東京、朝刊、社会面)と報じ、「戸籍上は男性でも自身の性別が女性だと認識しているトランスジェンダーの学生」という表現を用いている。同記事では、「トランスジェンダーは

特定されるかもしれませんが、書く。四日前に私の友人だった女の子がなくなりました。

まだ詳しいことは分かりませんが、ほぼ自ら選んだものであるとのこと。彼女はトランス女性でした。つまり生まれたとき戸籍は男性とされて、でも自分を女性だと自認していた、トランスジェンダーの女性でした。

ツイッターが原因かは正直わかりません。

でも私はそう思ってる。

半年前、御茶ノ水女子大学がトランス女性の入学を受け入れるというニュースに喜んだ彼女は、ツイッターで喜びを表現して、あるアカウントから悪意あるセクマイ様やトランス様という言葉を受け取ったようです。そのとき彼女は私からみても分かるほどとても不安定でした。

いつもは、失恋しても、ひどい恋愛をしても、すぐケロッとしてる強くて優しい人でした。

彼女が高校生で学ランを着ていた頃からずっと側で見ているので知っています。彼女が学ランを脱いで、メイクしてファッションも可愛くして、身体に思うように手を加えて、大学を一年休学して、そして女性として復学して、仕事を見つけて、その間ずっと私と仲良くしてくれました。<sup>6</sup>

トランスジェンダーを排除する発言を行っている人の中には、トランス女性のことを「男体持ち」<sup>7</sup>と呼ぶ人まで現れた。お茶の水女子大学の宣言が、性別二分法によって生じた不利益を是正し、社会的な障壁を取り除くことを目指しているということはすでに述べたが、それに対して、「男体持ち」という言葉を投げかけることは、生まれたときに、医学的、法的に割り振られた性別へと、トランス女性を引き戻すものであり、紛れもなく、ジェンダーの規範を強化し、性別二分法を強化することにも繋がる。トランスジェンダーを排除する可能性のある発言は、フェミニストの間からも起こり、現在も議論が続いている。社会学、視覚文化研究の視座からジェンダー、セクシュアリティについて研究している堀あきこは、この事態について次のように批判している。

身体上の性と自分自身が認識する性が異なる人」と定義している。「毎日新聞」は、「トランスジェンダー：学生受け入れ公表 お茶女大、多様な性「尊重」」（2018年7月11日、東京、朝刊、総合面）とも報じており、同記事では、「自治体がLGBTなどの性的少数者のカップル認定を始めるなど、国内では性の多様性を認める流れが進みつつあり、日本女子大や津田塾大、東京女子大でもトランスジェンダー受け入れの検討が進められている」とまとめており、社会的な意義について触れている。

「日経新聞」は、新聞の紙面と「日経速報ニュースアーカイブ」で小見出しが大きく異なる。例えば、「「戸籍は男性」でも女子大で学ぶ、トランスジェンダー、受け入れ検討校広がる」（「日本経済新聞」2018年7月11日、朝刊、34ページ）、「「心は女性」、女子大で受け入れ検討広がる」（「日経速報ニュースアーカイブ」2018年7月10日18:50 <https://www.nikkei.com/article/DGXMZ03280239010072018CR0000/>

### 3

「トランスジェンダー学生の受入れについて」（「お茶の水女子大学入試情報」2018年7月10日 <http://www.ao.ocha.ac.jp/menu/001/040/d006117.html>

### 4

例えば、「欧米諸国のLGBTの就労をめぐる状況：アメリカ 法的保護の地域格差と大企業の取り組みの進展」（独立行政法人労働政策研究・研修機構 2017年4月 [https://www.jil.go.jp/foreign/labor\\_system/2017/04/usa.html](https://www.jil.go.jp/foreign/labor_system/2017/04/usa.html)）など。同ホームページからは、イギリス、ドイツ、フランスの状況についての報告も読める。

### 5

2018年7月5日、NHKの報道を引用しながら、作家の百田尚樹は、「よーし、今から受験勉強に挑戦して、2020年にお茶の水女子大学に入学を目指すぞ!」（2018年7月5日 <https://mobile.twitter.com/hyakutanaoki/status/1014553691850924033>）とツイートしている。お茶の水女子大学が、トランスジェンダーの学生の受け入れを決定した理由や社会的な使命の説明を軽視し、設備整備を含めて準備してきたことを考慮に入れない発言であることは間違いない。「LITERA」の記事で、小杉みずすは、この発言の危険性について次のように指摘する。

女性の経験は、当然、無視できるものではありません。フェミニズムは女性の経験を大切にするものです。けれど、「男性寄りの肉体、外見のトランス女性が、性自認だけで自由に女子トイレを使うこと」に恐怖を感じるという言葉のように、トランス女性の身体をジャッジしようとする声や、トランス女性のトイレ使用と性犯罪の発生が当然のつながりを持っているかのような言葉は、同意できるようなものではありません。<sup>6</sup>

2019年1月15日には、堀がTwitterで呼びかけ、「#トランスジェンダーとともに」、「#とともにあるためのフェミニズム」という二つのハッシュタグを使って、様々な領域の研究者が、トランス排除に抗うための記事を書いている。私は本稿をその流れの一つとして位置づけたい。ジェンダーを生み出すメカニズムや権力関係について考え、「女性性」がどのような歴史性の中で機能しているのかについて研究し、現在のジェンダーのあり方に変容をもたらす可能性について手探りすることは、フェミニズム、クィア批評にとって、つねに重要でありつづけるからだ。

本稿では、インベカマリ★の写真集『理想の猫じゃない』(2018)をとりあげ、ジェンダー規範と承認をめぐる問題について論じる。その際、私は、この文章が、「トランス肯定的な仕事」になるようにしたいと考えている。「トランス肯定的な仕事」という言葉は、フェミニズムとクィア批評の緊張関係の中で理論を切り開いた文学者であるイヴ・コゾフスキー・セジウィックが、『クローゼットの認識論』(2018[1990])の中で用いた「ゲイ肯定的な仕事」という言葉を意識している。「ホモ／ヘテロセクシュアルの定義」の問題について論じるセジウィックの議論と「トランス／シスジェンダーの定義」(というよりも、トランス／シスジェンダーのどちらをも、生得的な「女体」や本質的で可変性のない存在に還元しようとする強力なセックスという文化装置)について論じている本稿の議論は同じ射程を持つものではないことは承知している。けれども、「性的な活動とアイデンティティの意味と経験は、ある所定の社会の他の歴史的、文化的に変化する側面との相互の構築化に、どの程度完全に依存しているのか」(セジウィック2018[1990]:56)と尋ねる「系統発生論的問いかけ」も、「個人におけるホモ[あるいはヘテロ]セクシュアリティの原因は何か」(セジウィック2018[1990]:56)と尋ねる「個体発生論的問いかけ」も、1980年代のエイズ危機を思い出せばわかるように、「ゲイの集団殺害と結びつくような思考の連結関係」(セジウィック2018[1990]:56)と切り離せず、あるアイデンティティの根絶を引き起こしてきたということは記憶されてもよいはずだ。セジウィックが俎上にあげる、本質主義と構築主義という対立は、その実、遺伝科学や生物学の知(それは紛れもなく文化的な装置である)によって、個人におけるホモセクシュアルの原因を説明しようとしたり、ある身体を指定

百田のツイートは単なる“お寒い冗談”ではない。なぜならば、性自認を男性と公言している百田が「女子大を目指すぞ!」と宣言することは、明らかに「自分の性自認を偽って女子大に入り込む不逞な輩がいるかもしれない」「トランスジェンダーの人は性自認を偽っているのではないか」という偏見を助長するからだ。「百田尚樹がお茶の水女子大のトランスジェンダー入学に下品な差別攻撃!「よーし今から勉強して入学を目指すぞ!」「LITERA」2018年7月14日 [https://lite-ra.com/2018/07/post-4125\\_2.html](https://lite-ra.com/2018/07/post-4125_2.html))

6

「ツイッターのせいで高校からの友達が死んだ」「はてな匿名ダイアリー」2019年1月9日 <https://anond.hatelabo.jp/20190109004202>

7

註6で取り上げたブログには次のように書かれている。

でも半年前にツイッターで、トランス様とか「男体持ち」と言われて、「トランス」で検索すると凄まじい量の攻撃があるのを見て、男性たちが「俺も女装して女子大に入る笑」みたいにバカにしたり茶化してるのを見て、何もしてなくてもそういうツイートが流れてくるのを見て、そんな風にトランスを嫌悪したりバカにしたり排除したりするツイートを沢山の人がしてるのを見て、ツイッターで繋がっている他のトランス仲間が傷ついたりセラピーに行ったりしてるのを見て、本人も「この状況はきつい」と私に伝えて泣いてしまうほどふさぎこんでました。(「ツイッターのせいで高校からの友達が死んだ」「はてな匿名ダイアリー」2019年1月9日 <https://anond.hatelabo.jp/20190109004202>)

また、「ツイート：お茶の水女子大の件-1 女子大の意義」(「Gau Gauジェンダー関係または周辺について色々」2018年7月4日 <http://ttilleo.seesaa.net/article/460396033.html>)などのサイトにおいて、「男体持ち」という発言を含め、お茶の水女子大学のトランス女性の受け入れに対するTwitter上の「批判」がまとめられている。

したり、ある集団を属性に還元してする危険性をはらんでいる。従って、セジウィックは、すでにあるこうした不安定な概念を用いる代わりに、「マイノリティ化の見解」と「ユニヴァーサルライジング普遍化の見解」という言葉を採用することで、「同じ分析的仕事を、より有効にできる」(セジウィック2018〔1990〕:56)と考えたのだ。セジウィックは、「ホモ／ヘテロセクシュアルの定義はいったい誰の人生において主要で困難な問題であり続けるのか」(セジウィック2018〔1990〕:56)と問いかける。先ほども述べたとおり、セジウィックの議論を再検討することなく、用いることはできない。しかし、「ゲイ肯定的仕事は個人の性の嗜好やアイデンティティの起源に関しての、どの特定の説明にもできるだけ頼らないことを目指すのが重要だと思う」(セジウィック2018〔1990〕:56-57)と指摘している点は、「トランス肯定的な仕事」を行う上でも、いつも念頭におくべき重要な言葉だろう。

私は、インベの写真とインタビューテキストと向かい合うとき、そこに写る一人ひとりの女性の経験や怒りが連なって、たとえ、沈黙していても、語っているように見える。「ツイッターのせいで高校からの友達が死んだ」という記事で言及されている彼女がインベの写真に写っていたならば、彼女は何を話したのだろうか。傷ついた経験を話しあい、連帯する可能性を排除することのないフェミニズム批評は、「トランス肯定的な仕事」の中でしか可能ではないだろう。セジウィックと同じく、1990年代からフェミニズム、クィア理論を牽引してきたジュディス・バトラーは、「ジェンダーをほどく」<sup>10</sup>の中で次のように述べている。

フェミニストのなかには、トランスジェンダーの運動は性的差異をずらしたり取り込んだりする試みだと言って、公的に憂慮の念を表明している人もいますが、この見方が忘れてるのは、一般の価値観がこの二つの運動——トランスジェンダーの運動とフェミニズムの運動——を必然的に出会わせていることです。もしもジェンダーを歴史的カテゴリーと取れば(そうすべきだと、ジョン・スコットが主張しています)、分析的仕事としてわたしたちに残されているのは、いかにジェンダーが機能しているのかを知るために、わたしたちの思考の枠組みを継続的に修正していくことです。(バトラー2008:176-177)

バトラーは、さらに、「あたかも自然で必要不可欠の特質であるかのように女性性を女の身体に帰着させること自体が、規範的枠組みのなかでも起こっているものであり、そこでは、女性性を生物学的女に割り当てることが、ジェンダーそれ自体を生み出すメカニズムになっている」(バトラー2008:177)とも指摘する。バトラーは、可変性がないものとしてジェンダーを考えたり、現在の文化の中で想定されている「女性性」がどのような社会的な歴史性の中で

8  
堀あきこ「トランスジェンダーとフェミニズム ツイッターの惨状に対して研究者ができること」『wezzy』2019年1月15日 <https://wezz-y.com/archives/62688>

9  
小宮友根は、「女性専用スペース」とトランスフォビア」(『frootsのtwitter補完メモ』2019年1月12日 <https://froots.hatenablog.com/entry/2019/01/12/100233>)という記事の中で、タリア・メイ・ベッチャーの「トランス初級講座」という論文の紹介している。ほかには以下の記事がインターネット上で読める。

・飯野由里子「ネット公開「共に在るためのフェミニズム」」(『note』2019年1月19日 <https://note.mu/horry/n/n27767e4e507f>)、

・石田仁「人々のトランスジェンダー嫌悪が少なくなれば、ジェンダー平等感覚の形成は進む」(『wezzy』2019年1月19日 <https://wezz-y.com/archives/62967>)、

ハッシュタグが作られる前にも、以下の記事が投稿されていた。

・清水晶子「Where We Are Right Now: 多義的に進化するフェミニズムの現在地 (Harper's Bazaar 2017年6月号掲載)」(2019年1月7日 <https://m.facebook.com/notes/shimizu-akiko/where-we-are-right-now-or-where-we-thought-we-are/2272381666119622/>)

・遠藤まめた「「#トランス女性性」は女性性です」が問うているフェミニズムの課題」(『wezzy』2019年1月13日 <https://wezz-y.com/archives/62714>)

10  
引用した部分は、『Undoing Gender』(Butler 2004)「Introduction: Acting in Concert」に詳しい。

機能しているのかについて分析し、ジェンダーのあり方に変容をもたらす可能性に言及する。この可能性を開くテキストとして、インベの写真集『理想の猫じゃない』を読んでみたいと思う。

## 二、インベカヨリ★『理想の猫じゃない』論

インベカヨリ★は、第39回木村伊兵衛写真賞の候補作となった『やっぱ月帰るわ、私。』（赤々舎、2013）、第43回伊奈信男賞を受賞した『理想の猫じゃない』（赤々舎、2018）などを刊行している写真家、ノンフィクションライターだ。インベは、規範的なあり方を求める社会の中で、傷つき、痛む女性たちの写真を撮り続けてきた。インタビューを織り交ぜながら、現代社会を生きる女性たちの姿を浮き彫りにするインベの写真は大きなインパクトを残す。

『理想の猫じゃない』という、写真集のタイトルは、2017年10月、北九州で高校の臨時教職員をしていた男性が、飼っていた20匹もの猫を殺害し、燃えるゴミとして捨て、動物愛護法違反で逮捕されたとき、犯行動機として、「理想の猫じゃないから殺した」と主張し、「呼んだらすぐにやってきて、体を触らせて、きちんとトイレをするのが理想の猫だ」（インベ2018）<sup>11</sup>と供述した事件を念頭に置いてつけられた。インベは、家庭、学校、企業など、具体的な場面をあげながら、「人間にとっては、他人が求める理想を演じているほうが、自分を貫くよりもはるかに容易い。世間は「理想の猫」に擬態した人で溢れている」（インベ2018）と述べ、その規範から外れたときに何が起こるのかについて、次のように指摘する。

どう頑張っても「理想の猫」になれなかったとき、あるいは「理想の猫」からの脱出を試みたとき、人は社会に殺されるリスクを背負うことになる。（インベ2018）

インベが、「理想の猫」について書いている内容は、紛れもなく、ジェンダー規範と承認をめぐる問題と重なっている。「ジェンダー諸規範を再生産するよう義務付けられている」（パトラー2018b:43）この社会の中で、「ジェンダーを正しくおこなえない者」（パトラー2018a[1990]:245）は規則にのっとって懲罰を受ける。ジェンダーの諸規範は強制的に「男らしさ」や「女らしさ」を行為遂行することを求めるし、規範に従わないことは大きなリスクを与える。

写真集『理想の猫じゃない』には、自ら立ち上げた劇団で脚本を書いているというノミヤさんが、坊主頭で、満面の笑みを浮かべながら、刺繍がついた真っ白なドレスを着ている写真がある（図1）。ノミヤさんは、かつて、役に合わせて髪を伸ばしたときのことを思い出して、次のように話す。

11  
インベカヨリ★『理想の猫じゃない』（赤々舎、2018）にはページ数が付されていない。この文章は、「理想の猫じゃない」より。



「自分が役者として出演しなくちゃいけないとき、役に合わせて髪を伸ばしたんです。肩より長く。そのとき女性として扱われたんですね。簡単に言うと、新しく出会った男性達に口説かれた。それが一番の違い。髪が長いと女として見られる。イメージってあるんだなあって。坊主にしてもその人たちは変わらないのかな」(インベ2018)

ノミヤさんが髪を伸ばしたのは、「役に合わせ」るためだ。けれども、「新しく出会った男性達」は、ノミヤさんを自らの期待に沿うようにジェンダー化して、「確立された二つのジェンダー・カテゴリー」(バトラー2018b:43)へと振り分けようとする。「そのとき女性として扱



図1 「第一関門」(2枚)

われた」と話すとき、ノミヤさんが示すのは、予期もせず、望みもしない形で、「出会った男性達」が抱く期待や幻想によって、女性として存在することを求められる瞬間だ。この瞬間、ジェンダー諸規範が反復され、「女らしくあれ」という強制、押しつけが行われ、ノミヤさんはその呼びかけに応答することを迫られる。このやりとりは一瞬の出来事のように思える。しかし、私たちの身体はつねに他者に対して現れ、つねに他者にさらされている。ハンナ・アーレントが行った「現れの空間」をめぐる議論を批判的に継承しながら、バトラーは、「現れ」は「ある種の間主観的対決という条件」(バトラー2018b:102)においてのみ生じると指摘する。

私たちが身体的に誰であるかは、既に「対」他存在という仕方であり、私たちが見ることも聞くこともできないような仕方で見られる。つまり、私たちは、自分自身が完全に予期も管理もできないような視点を持った他者に対して、身体的に取り扱い可能となるのである。(バトラー2018b:102)

私たちが他者にさらされるとき、私たちは、「理想の猫」であることを迫られる。これがいかに理不尽であるのかは、押しつけられる理想と実際の身体との埋めがたいギャップについて考えてみるだけでよいだろう<sup>12</sup>。その際、問題なのは、「誰が承認可能、「判別可能」で誰がそうでないかを条件づける性的諸規範、ジェンダー諸規範」(バトラー2018b:53)がつねに働いているという点だ。女性として承認可能であり、判別可能であるという男性たちのジャッジは、ノミヤさんを強制的に女性というカテゴリーに振り分ける。男性たちは、自分たちが理解したい仕方(しかし、社会的な規範を反復する仕方)で、

## 12

バトラーは「諸理想」と「私たちの様々な生きられた努力」とのギャップについて次のように述べている。

ジェンダーをめぐる文化的諸規範に対する理想性——幻影的次元ではないとしても——が存在する。また、生育途上の人間たちがそれらの諸規範を反覆し、それを適応させようとするときでさえ、彼らもまた確実にそれら諸理想——その多くは互いに衝突する——と身体化における私たちの様々な生きられた努力——そこでは私たち自身の理解と他者の理解が互いにすれ違う——との間の執拗なギャップに気付くことになる。(バトラー2018b:43)

ノミヤさんを女性として扱い、そう見なし、ジェンダーの徴しづけを行う。だから、ノミヤさんが、「坊主」にすることで行おうとしているのは、他者との関係性のはじまりに「性別」がある社会への異議申し立てであり、「社会的に設定され維持されている理解可能性の規範」(バトラー2018a[1990]:46)を変容することの要求である。

「坊主になるにしても、それだけで女を捨てるわけじゃないですよ。中性的になりたいわけでも、男になりたいわけでもない。ただ人間関係の第一関門は、性別がないところから始まると嬉しいなってだけ」(インベ2018)

ノミヤさんが求めるのは、ジェンダー規範が持つ強制力を緩めることだといってもよいのではないだろうか。バトラーは、『ジェンダー・トラブル』の中で、「ジェンダーは、強制的な制度のなかで<sup>サバイバル</sup>存続していくための戦略となり、明瞭な懲罰結果を持つパフォーマンスとなる」(バトラー2018a[1990]:245)と指摘しているが、ノミヤさんがいう「第一関門」を打ち壊すことは、「社会的に設定され維持されている理解可能性の規範」(バトラー2018a[1990]:46)の決定的な見直しを求めるものである。ジェンダーを「継続的な作りなおしの可能性」(バトラー2008:177)に開かれたものとするとは、ジェンダー規範が持つ強制力を緩めるだけではなく、ジェンダーを振り分けることによって生じている不均衡な形で配分される暴力への抵抗ともなりうる。それは怒りの表明だといってもよいだろう。インベは、写真集『やっぱ月帰るわ、私。』(2013)の「あとがき」の中で次のように述べる。

あらゆる感情のなかでも、私は「怒り」の感情に生命力を感じるから、被写体から鋭い視線を引き出して撮りたくなる。劣等感や悲しみや絶望など、人生に抑揚をつける感情の根源にあるのは「怒り」だと思うし、自分自身に向けられる怒りの中には、外部からの抑圧、たとえば“世間の常識”や“家庭環境”や“男性優位な社会”や“生まれた時代”など、様々な抑圧に対する怒りが秘められている。怒りは主張だから、そうした言葉以外で見えてくる発言を撮りたくなる。

人間とは、その人のもつエネルギーのことだから、顔や体を超えた先にある魂を写したい。(インベ2013)

インベが、「怒りは主張だから、そうした言葉以外で見えてくる発言を撮りたくなる」と述べている点は重要だろう。インベの写真に写る女性たちは、この社会の不均衡さについて、「集合した諸身体」として、「語っている」<sup>13</sup>。私は街を歩きたい。私はゆっくり眠りたい。私は誰かと喋りたい。私は家族を壊したい。私は期待を裏切りたい。私は私でありたくない。私は愛して欲し

13

バトラーは次のように指摘している。

実際、私たちは、ある種の身体的な行為化によって何がなされ、そして何が行われるのかを理解するため、言語行為を再考する必要がある。すなわち、集合した諸身体は、たとえそれらが黙って立っていないように、私たちは使い捨てにできるわけではないと「語っている」のである。(バトラー2018b:27)

くない。私は自由に話したい。私は誰かを信じたい。私は理想の猫じゃない。だから。私はここにいてもよい。私は弱みを見せてよい。私は家族を捨ててよい。私は楽しく生きてよい。私は存在してもよい。私は怒りを告げてよい。私は自分を好きでよい。私は自分をいやでよい。私は誰かに頼ってよい。私はここで生きてよい。

そう言い聞かせるところからはじめなければならないほど、私は、毎日、傷ついていたのかと、私は、私が知っているこの感情を写真集の中にいる彼女たちから受けとる。私は、ようやく、怒りやさみしさ、痛さや悔しさに気がつく。



図2 「自分勝手の推奨」



図3 「裂けるチーズ現象」

例えば、ラーメンを食べながら、落ち葉が散っている街路を歩いている、スーツ姿の高石舞さんの写真がある(図2)。高石さんは、小さい頃からずっと親や周囲の人々の顔色を窺っていたために、「気を遣う」ことが身についてしまったという。「自分勝手の推奨」というこの記事で、高石さんは、「最近の課題は、もっと自分勝手になろうってことです」と話す。ジェンダーの規範に合わせてしようとしながらも、この写真に写る舞さんはどこかズレている。けれども、そのズレが、やはりがんじがらめになりながら日々を過ごす私を少しだけ解放してくれる。

「サッカーや野球等の球技は禁止です」と書かれた看板を背景にして、公園の地面の上に花柄のワンピース姿で横たわり、顔を持ち上げて、こちらをじっと眼差すのは、羽菜さんの写真だ(図3)。羽菜さんは、「普通を装わないと生きていけないし、仕事もできないから、表面上はまともにしてるんです」と話す。自分は、「本当は幽霊で、何かの罰ゲームで人間にさせられてる気分」(インベ2018)なのだという。羽菜さんは、「人の期待を裏切る快感もあるし、同時に安定したい気持ち」を「さけるチーズ現象」と呼んでいる。「期待」や



「幻想」に答えなければ、生き延びることができない。だからこそ、羽葉さんは、「もっと道を踏み外したい!!」と叫ぶ。その叫びが、「私も、そう叫びたかったのだ」と、私に教えてくれる。

これらの写真の一つ一つは唯一無比の経験であるが、私は彼女たちの言葉にうなずいてばかりいる。私は、彼女たちの言葉によって、はじめて私に近づいてゆく。過食嘔吐、家族関係の歪み、他者への過度の依存など、私が知りたかった自分について教えてくれる。私たちは、互いの物語を読みあひながら、言葉の端緒を見つける<sup>14</sup>。インベの写真集から彼女たちの物語を受けとると同じように、「ツイッターのせいで高校からの友達が死んだ」というブログの中で語られる彼女の物語を読みながら、私は私自身について知るのである。

彼女は、女性として他の女性と同じ目にあつたことが何度もあります。痴漢や、ストーカー、しつこい声かけなどで、多くの女性と同じように性犯罪で怖い目にあつてました。

彼女は女性で、そして他の女性と同じ悩みを持ってた。多くの女性が持たない種類の悩みも持ってたけど、だからって彼女が女性じゃないわけじゃない。だからって彼女が存在しないわけじゃない。<sup>15</sup>

私の隣にいて、私と共にあり、私自身でもあるような彼女の、かけがえのない生のことを私は決して忘れないだろう。眠りからさめること、食事をすること、服を脱ぐこと、抱きしめること、本を読むこと、風邪を引くこと、走りだすこと、年をとること、花が咲くこと、雨が降ること、季節がめぐること、他人を知ること、そして、そのすべてがまばゆいということ。それらを安心して繰り返して行けるように、私は、属性としてではなく、私として街を歩きたい。その望みを語るための言葉を、私は、彼女たちから受けとってきたのだから。

14

シヨシヤナ・フェルマンは、『女が読むとき 女が書くとき—自伝的新フェミニズム批評』(1998)の中で次のように指摘する。

女たちは、自分を対象物として見るように訓練され、「他者」の位置に自分を据えて、自らを疎外するようにと躰けられる。そのため、私たちが手にする物語は、女を映し出すことはない。それは、はなから、物語などではあり得ない。むしろ、それは物語になっていく物語であるといえるであろう。物語が物語になることが出来るためには、女たちによる読みの絆を通さねばならない。(フェルマン1998:24)

15

「ツイッターのせいで高校からの友達が死んだ」(「はてな匿名ダイアリー」2019年1月9日 [https://anond.hatelabo.jp/20190109004202?fbclid=IwAR0\\_5aJlqMC4mUi8rzgiYjYAmEHsT9qmjiASHjaqTWsHvz4tr60w1193Kc](https://anond.hatelabo.jp/20190109004202?fbclid=IwAR0_5aJlqMC4mUi8rzgiYjYAmEHsT9qmjiASHjaqTWsHvz4tr60w1193Kc))

\*インターネットの記事は2019年1月25日に最終閲覧し、URLが有効であることを確認した。

---

【引用文献一覧】

インベカヨリ★(2013)『やっぱ月帰るわ、私。』赤々舎。

——(2018)『理想の猫じゃない』赤々舎。

セジウィック, イブ, K(2018)『クローゼットの認識論—セクシュアリティの20世紀[新装版]』外岡尚美(訳)、青土社。(原著 Sedgwick, Eve K.1990. *Epistemology of the Closet*. (University of California Press:1st edition, 1990)

バトラー, ジュディス(2008)「ジェンダーをほどく」竹村和子(訳)(竹村和子(編著)『ジェンダー研究のフロンティア 5 欲望・暴力のレジーム 揺らぐ表象／格闘する理論』作品社, pp. 171-186.

——(2012)『戦争の枠組—生はいつ嘆きうるものであるのか』清水晶子(訳)、筑摩書房。(原著 Butler, Judith.2009. *Frames of War: When Is Life Grievable?*. London: Verso)

——(2018a)『ジェンダー・トラブラーフェミニズムとアイデンティティの攪乱』竹村和子(訳)、青土社。(原著 1990. *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*: New York: Routledge)

——(2018b)『アセンブリー—行為遂行性・複数性・政治』佐藤嘉幸・清水知子(訳)、青土社。(原著 2015. *Notes Toward a Performative Theory of Assembly*, Harvard University Press)

Butler, Judith (2004) *Undoing Gender*, New York:Routledge.

フェルマン, ショシャナ(1998)『女が読むとき 女が書くとき—自伝的新フェミニズム批評』下河辺美知子(訳)、勁草書房。(原著 Felman, Shoshana. 1993. *What does a woman want? : reading and sexual difference*, Johns Hopkins University Press)